

法的統一体および集合的統一体の 刑事責任（抄訳）

竹之下勝司*

まえがき

国家に準ずるほどの巨大企業が国際化の進んだ社会の中で、国境を越えて活動している現在、いわゆる企業の刑事責任をめぐる論争は、以前にも増して激しいものとなっている。我が国についてもそれは例外ではなく、様々な議論がみられるところである。

一部抜粋による翻訳という形で紹介させて頂く本書 Albin Eser, Günter Heine, Barbara Huber (eds.), *Criminal Responsibility of Legal and Collective Entities*, Beiträge und Materialien aus dem Max-Planck-Institut für ausländisches und internationales Strafrecht, Freiburg i. Br., Herausgegeben von Professor Dr. Dres. h.c. Albin Eser, M.C.J., Band S 78 は、1998年にベルリンで開催された国際シンポジウムにおける報告を集約した論文集である。そのシンポジウムは、1「組織の刑事責任の形式とその発展の理由」、2「各国における展開および国際的展開」、3「集合的統一体の刑事責任に関する根拠の確立」、4「制裁」、5「訴訟法」、6「刑事責任に対する代替案」、7「既存の規制についての経験の評価」という各テーマに関する基調報告に対してコメンテーターがそれぞれ自らの国における現状等についてコメントを行うとい

う形で行われた。国境を接する国の多い欧州において、企業もしくは類似する組織の刑事責任という問題は避けて通ることのできないものであり、そのような問題に対して、異なる法制度の中でどのように対応しているのかに関する各国の研究者の見解をそれぞれに比較検討することができるという点において、本書は非常に興味深いものであると思われる。

今回は、これまでのわが国における企業の刑事責任に関する議論ではあまり論ぜられることのなかった、企業犯罪に関する刑事手続の部分を取り上げて紹介したいとの思いに基づいて、5「訴訟法」の基調報告およびコメントの翻訳を紹介したいと思う。当該箇所は、オランダとデンマークの研究者による報告であるが、各国について我が国で入手可能な資料は、その数が限られており、紹介に値するのではないかと考える。

なお、翻訳については、早稲田大学田口守一教授が、マックス・プランク外国刑法国際刑法研究所所長ウルリッヒ・ジーバー教授より許可をとって下さった。両教授に御礼申し上げる。

* 元広島大学大学院社会科学研究科法律学専攻博士課程後期、早稲田大学受託研究研究補助員、COE研究会会員